日本人だけが知らない世界の常識

第五話　しぐさ編（前編）

　何気ない小さなしぐさが、相手を侮辱してしまうことがあります。
　たとえば、上司が「よくやった」という意味で女性社員の頭をなでたら「セクハラ」とされたり、「がんばれよ」という意味で男性社員の肩を叩いたら「殴られた」と思われたり。悪気がなくても、タイミングがずれると別の意味になってしまうのです。
　同じ国の人間同士でも、日常的にこういうことがあるわけですから、国籍が違えば似たようなことはさらに頻繁に起こるでしょう。
　たとえばインドで、左手で握手を求めたり、何かを食べたりしたら、眉をしかめられます。この国では、左手はトイレの際にお尻をふく手なので不浄とされ、握手をしたり、物を食べたりしてはいけないとされているのです。それを知らずに左手を使うと、相手は「侮辱された」と感じるでしょう。何も知らない日本人からすれば、「え？　まったく悪気はないのに」という気持ちですよね。
　世界へ出ると、このような些細なすれ違いは、数え切れないぐらい起こるのです。

【子どもへの虐待】
　健吾くん（二十二歳）は、大学四年の夏に卒業旅行で友人とベトナムへ行った。
　向かったのは、フエという古都。レンタルバイクを借り、周辺にある世界遺産を回った。
　午後になり、健吾くんは一人バイクに乗って郊外へ向かった。根っからの理科系の健吾くんは遺跡に興味がないため、牧歌的な田舎町をツーリングしたいと思ったのだ。
　一時間ほど農村を回っていると、村人が手をふってきた。
「そこの日本人、うちに遊びに来ないか？」
　人の良さそうな顔をした四十代の男性だ。
　健吾くんは、簡単なベトナム語を勉強していたこともあり、家にお邪魔することにした。
　家では、男性がバナナを出して歓迎してくれた。「こんな村に外国人が来ることはあまりない。お茶でも飲んでいってくれ」と。健吾くんは辞書を引きながら、ベトナム語でいろんな会話をした。
　しばらくして、奥さんが幼い娘をつれて帰ってきた。まだ三歳のかわいらしい子どもだ。健吾くんは保育士として保育園に就職が決まっているほど、子どものことが好きだった。
「すごくかわいいですね」と言いながら、健吾くんは娘の頭をなでた。
　そのときだった。突然男性が立ち上がり、「なんてことするんだ！　出ていけ！」と怒鳴った。母親は泣きだし、つられて幼い娘までもが泣きはじめる。
　健吾くんは意味がわからず首を傾げた。
「さっさと出ていけ！」
　男性は健吾くんの首根っこをつかむと、引きずり出すように外へつれていった。健吾くんは意味がわからぬままバイクにまたがり、逃げるように立ち去った。

なぜこうしたことが起きたのだろうか？
後でホテルの従業員に聞いたところ、ベトナムでは子どもに対するタブーが二つあるのだという。
一つが「子どもの頭をなでてはいけない」ということ。「頭をなでると、子供の成長が止まってしまう」、あるいは「頭に宿っている神様が逃げてしまう」といわれているのだ。
もう一つが、「『かわいい』と言ってはいけない」ということ。「かわいい」と声をかけると、それ以上美しくならなくなると信じられているのである。
健吾くんはこうしたベトナムの習慣を知らず、子どもの頭をなでて「かわいい」と言ってしまった。父親が猛り狂い、母親が泣きだしたのはそのせいだったのである。

こうした子どもに対するタブーは、東南アジアの他の国にもあります。タイ、シンガポール、インドネシアなども同じですね。
私はこの「常識」が非常に好きです。「子どもにかわいいと言うと、それ以上子どもが美しくならない」なんて心配するのは、親の子どもに対する愛情が溢れているからでしょう。子どもがかわいくて仕方ないし、もっとかわいくなってほしい。そんな無限とも言える愛情があるからこそ、こうしたタブー、あるいは迷信がつくられるのです。
親が子どものことを思うあまりに生まれたタブーや迷信はたくさんあります。子どもが生まれてからはもちろんのこと、お腹のなかにいるときについてもです。
たとえば、次のようなものです。
「妊婦は近所で火事が起きても、見に行ってはいけない。赤ちゃんにアザができてしまうから」
「妊娠しているときに、葬儀に出席してはいけない。死者がお腹の赤ちゃんをつれさってしまうからだ。どうしても行かなければならない場合は、外側に鏡を向けてお腹のなかにいれておく必要がある。そうすれば、死者は赤ちゃんがいるとは気づかない」
これらも、母親が子どものことを思うあまりに生まれた迷信でしょう。
外国にも、同じような迷信があります。
「母親は妊娠中にナスを食べてはいけない。ナスを食べると、赤ちゃんの肌の色が黒くなってしまう」（フィリピン）
「妊娠中の女性は、日食や月食を見てはいけない。赤ちゃんに異常が起きてしまうから」（インド）
どこの国でも母親がお腹の赤ちゃんを思う気持ちは同じなんですね。
でも、これは子どもも同じです。親を慕う気持ちから様々な迷信が生まれ、それを信じて必死に守ろうとします。たとえば、次のような話です。
「霊柩車が通ったら、親指を隠さなければならない。そうしなければ、親が死んでしまうからだ」
私自身、子どものとき、こうした迷信を信じて霊柩車が通るとあわてて親指を隠したものです。
国や地方によって、こうした習慣はまったく異なります。
外国へ行って、突然「娘のことをかわいいと言うな！」と叱られたり、「息子の頭をなでるな！」と怒られたらびっくりするでしょう。しかし、そんなときは、落ちついて親がな

ぜそう言うのかを考えてみてください。きっと親子の大きな愛情を垣間見ることができ、安堵するはずです。

【ちょっと待って】
**　これもベトナムの話。**
**　フエの町で失敗した健吾くん。今度は友だちと一緒に電車で南下し、ホーチミンシティーにたどり着いた。ベトナム一の商都だ。**
**　健吾くんは地元のガイドを雇って、観光をすることにした。ガイドの言うことに従っていれば、フエでのような失敗はないだろうと思ったのだ。**
**　博物館をまわっていたとき、健吾くんは急に用を足したくなった。しかし、ガイドはどんどん先に行ってしまう。たまらなくなった健吾くんは、ガイドの肩を叩いて言った。**
「すみません、トイレに行きたいので、ちょっと待ってもらっていいですか」
**　すると、ガイドは急に怒りの形相になった。**
「何をするんだ！　君のガイドはもうしたくない。帰らせてもらう！」
**　ガイドはそう言うと、さっさと立ち去った。健吾くんは、またしても意味がわからず、ポカンと口を開けたまま立ちすくんだ。**
**　再び健吾くんは、ホテルの従業員にことの顛末を相談してみた。すると、従業員は次のように説明した。**
「あ、それは君が肩を叩いたからだよ。ベトナムでは、人を呼び止めるときに肩を叩いてはいけない。肩には、神様が宿っていると言われているからだ。肩を叩くと、その神様が逃げてしまうと信じられているんだよ」
**　健吾くんは、二度目の失態に頭を抱えてしまった。**

　こういう体験をすると、外国へ行っても怖くて何もできなくなってしまうかもしれませんね。
　以前、私の知り合いの女性がやはり似たような目にあったそうです。
　ミャンマーで寺院を回っていたとき、お坊さんが出てきていろいろ説明してくれたそうです。女性は感謝して、最後に記念撮影をして、握手をしました。すると、近くにいたおばさんたちが怒りながら集まってきて、こう言ったそうです。
「あんた、女のくせにお坊さんに触るなんてとんでもない！　常識をわきまえなさい！」
　東南アジアの仏教国では、お坊さんはとても神聖なものとされ、女性がその身体に触ることは禁じられています。お坊さんを汚す、あるいは惑わすと考えられているのです。彼女はその習慣を知らず、握手をしてしまったために怒られたのです。
　逆に、外国人が日本に来たときにも、似たような体験をすることがあります。
　ある中国人が日本の家庭に招かれました。中国人がその家の二歳の子どもと遊んでいたところ、頭に二カ所つむじがあることを見つけました。かわいらしかったので、そこを触ると、日本人の母親に怒られたそうです。
「やめてください。つむじを触ると下痢をしてしまいます」
　つむじに触ると下痢になるという迷信が日本にはあります。しかし、それには科学的根拠はありません。中国人からすれば、「なんでそんなわけのわからないことを言われて怒ら

れなければならないのだろう」となるのは当然です。日本人が外国で体験する戸惑いを、外国人も日本で体験しているということなのでしょう。

【ベッドのエチケット】

**　陽菜さんは日本で三年間会社勤めをした後、タイ人と結婚した。相手は元ムエタイの選手。旅行先で知り合いから紹介され、すぐ恋に落ち、そのままタイにわたって結婚したのである。**

**　だが半年後、陽菜さんは夫に蹴られて顔面を陥没骨折した。どうしてそんなことになったのだろう。**

**　陽菜さんとタイ人の夫はとても仲が良かった。収入もそこそこで、三日に一度はいいレストランで食事をしていた。陽菜さんはすっかりタイが気に入り、一生を過ごすつもりでいた。**

**　ある夜、夕食の辛い料理のせいか、陽菜さんはお腹を下してしまった。二人はダブルベッドで寝ていたが、陽菜さんは便意を催しては飛び起き、横にいる夫をまたいでトイレに駆け込んだ。**

**　最初、夫は寝ぼけ眼で「気をつけろ」と言っていた。陽菜さんは、暗い部屋を歩くのは危険だから気をつけろ、と気遣ってくれているものだと思い込んでいた。だが、夫は陽菜さんがトイレに行くたびに不機嫌になっていく。**

**　夜明け前、何度目かのトイレのとき、突然夫が起き、陽菜さんを蹴りつけた。陽菜さんは壁に吹っ飛ばされた。夫は叫んだ。**

「俺のことをまたぐんじゃねえ！　一度や二度ならまだしも、何度やれば気が済むんだ！」

**　タイには、女性が男性をまたいではいけないという習慣があった。陽菜さんはそれを知らず、何度も夫の上をまたいでいた。夫はそれに逆上し、思わずムエタイで鳴らした蹴りを見舞ったのである。陽菜さんは病院へ運ばれたものの、顔の骨が数カ所折れていた。**

　東南アジアでは、女性の些細な行動が男性の運を奪ってしまうという考え方があります。

　女性が男性をまたぐというのもそうですが、足の裏を向けるというのもあります。たとえば女性が横になり、傍にいる夫に足の裏を向けると、これ以上ない、夫への冒涜になることがあります。

　かつて、タイの農村に暮らす老人からこんな話を聞きました。

　太平洋戦争中、タイ人たちは日本軍の倉庫から食糧を次々と盗みました。日本兵が捕まえても捕まえても、またすぐに別の者たちが盗みにやってきます。日本兵は「次に盗んだら処刑だぞ」と脅しましたが、現地の人たちの盗みは一向に止みません。それほどまでの食糧難だったのでしょう。

　ある日、日本兵はタイ人の泥棒たちを捕まえた後、見せしめのため、娼婦にその顔を踏ませました。彼らが何を屈辱と感じるかをわかった上で、辱めたのです。タイ人たちはそれを見て慄き、その日からぴたりと盗みを止めました。

　数日後、娼婦に顔を踏みつけられたタイ人の泥棒たちは、悔しさのあまり、物陰で首を吊って自殺したといいます。彼らにとっては、それほど屈辱的なことだったのです。

　この話は、女性に足で踏みつけられることが、男性にとってどれだけ重いことなのかを

示しています。女性に踏みつけられることは、己を汚されることなのです。男尊女卑の観念から生まれた習慣ですね。

　最近は時代の流れとともに、男尊女卑の風潮も薄まりつつあります。それにともなって、次第にこうした習慣は廃れてきていますが、一部の地域ではまだ色濃く残ってもいます。女性の場合、男性をまたいだり、男性に足を向けたりすることは、極力避けるべきでしょう。